

1-4-6. 「こもりくの森」準備会（福岡県みやこ町）

（1）アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】20,454人

【面積】151.28 km²

【地勢】

みやこ町は福岡県の北東部、行橋市の南西側に位置し筑豊地方と隣接している。南北に長く、北側は北九州市と隣接し、南側は中津市と隣接して大分県との県境を成している。旧犀川町南部は英彦山の麓部にあり、谷や山地が多い。行橋市に隣接する地域や旧豊津・勝山町域は京都平野の田園地帯であり、今川や祓川が流れている。また北部にはカルスト台地の平尾台がある。

【気候、自然】

気候は比較的温暖で、平均気温 15.8℃、平均降水量 1716mm。平野部の田園地帯から山地帯までの連なりとなっている。

【歴史】

みやこ町は遺跡や遺物などが多くある。豊前国の国府跡や国分寺跡も豊津地区で発見されており、豊前国の中心地だったとされている。現在、国府跡地は豊前国府跡公園として整備されている。1866年、第二次長州征伐により攻撃を受けた小倉藩が小倉城に火を放ち、城から撤退。のち小倉藩は藩庁を現在の旧豊津町に新設した。豊津陣屋。1871年の廃藩置県で豊津県の県庁が置かれたが、同年内に小倉県に編入され、のちに小倉県が福岡県に編入されたため福岡県内に組み入れられた。1876年に起こった秋月の乱で戦場となった。このとき戦死した士族の墓は現在、「秋月党戦士の墓」として残っている。

【観光】

森林浴 100 選に選ばれた蛇淵キャンプ場や桜の名所仲哀公園、八景山自然公園、千女房桜、15万本の菖蒲が咲く豊津花菖蒲公園など、自然環境を生かした施設が多い。また、古代人の古墳、律令制時代の豊前国府などの史跡が残っている。歴史民俗博物館ではみやこ町出身のドイツ文学者、小宮豊隆が所蔵していた夏目漱石自筆の書画や手紙などを展示している。

【地域資源の概要】

みやこ町の南部、犀川町の伊良原に、ダム開発に伴って、森林公園が建設されようとしている。地域ではこの公園を環境教育の情報発信基地と位置付け、周辺の自然や文化を生かした体験プログラムを行っていきたいと考えている。

公園内には『沈黙の春』、『センス・オブ・ワンダー』のレイチェル・カーソンを記念する施設が建設されるとともに、公園内では生態系のバランスのとれた森づくりを進めていく計画である。また、近辺には英彦山修験の鷹嶺（たかくつ）権現や、江戸時代後期に建てられた永沼家住宅、地域を貫く祓川の源流部にある蛇淵（じゃぶち）の滝、そして無形民俗文化財である豊国楽（とよくにがく）、上伊良原神楽などがある。



現在整備中の森林公園の見取図。
ここを環境教育の情報発信基地として、地域の自然や文化を生かした体験プログラムを開発、実施していきたい。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

本地域では、ダム建設に伴って、地域の再構築が進行している。私どもの下伊良原地域については、長年にわたる協議と検討の結果、地域で取り組む事業として、森林公園を整備し、環境教育事業を立ち上げていくこととなり、1年あまり後の公園のオープンに向けて、計画は最終段階を迎えている。

環境教育事業の構築については、これまでに色んな方の教えを乞い、現在は新たな人材も加わって、計画の具体的な検討と明確化を進めている。森林公園内で行う森づくり、自然体験や環境教育をどうするかという問題と合わせて、森林公園を情報発信基地ととらえ、現実には地域のいろいろな自然的、文化的資源を生かす形で体験ツアー、体験プログラムを開発していくことを構想している。

今後森林公園の管理、運営を担い、事業主体となる予定の「こもりく学舎」は、地域住民から構成されており、人生経験は豊富で、事業に対する意欲もあるが、環境教育やエコツーリズム、自然体験プログラムの開発などといった分野では初心者の方がほとんどである。だからといって、安易に外部の事業者やコンサルティングに依存したり、成功事例の模倣に走ったのでは、本当に持続性のある良い事業は生まれてこないだろうという洞察も持っている。

最近、森林公園の管理、運営や自然体験プログラムの開発等に経験のある人材が住民として加わり、専門的な知識や視点についてアドバイスを行えるようになった。目下の大きな課題は、環境教育やエコツアーといった分野で、参加体験型の事業をどう構想、構築していくかという点と、これまで専門的な教育やトレーニングをあまり受けたことのない地域の方々に、優秀な自然案内人(インタープリター)、エコツアーガイドへと成長していってもらう点にあるといえる。

このような背景と課題を持つ私どもの地域へ、わが国の環境教育事業の草分け的存在である川嶋直氏に来ていただき、エコツーリズムの概念や、地域資源の生かし方、体験プログラムのつくり方、インタープリテーションの手法、そして組織の運営方法等について高度なアドバイスをいただくことができればと切望し、今回の派遣申請となった。

現在、私どもの地域では、自然生態系の回復を理念とする森づくりを中心にした森林公園整備の計画が進行している。また、施設の建設計画と並行して、森林公園を基地とした、環境教育事業の立ち上げについても計画を進めている。今後、私どもの組織では、森林公園の管理、運営と、環境教育事業の運営が主な活動内容となる予定である。森林公園は森づくりのモデル地域であり、情報発信基地となり、体験プログラムを開発、実施していく。プログラムには地域資源を積極的に活用し、地域の人材を主体として、インタープリターやエコツーリズムガイドの養成を行っていく予定である。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 1 月 30 日（月）～平成 29 年 2 月 1 日（水）
場 所	福岡県京都郡みやこ町犀川下伊良原の森林公園建設予定地を中心とした地域 ・森林公園予定地 ・公民館 ・コミュニティセンター ・みやこ伊良原学園 ・蛇淵キャンプ場 ・鷹峯(たかくつ)権現 ・みやこ町役場
ア ド バ イ ザ ー	川嶋 直 氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）
参 加 者	計 44 名 「こもりくの森」準備会メンバー（7 名） 森林公園検討委員会（18 名） みやこ町長 みやこ町総合政策課（4 名） 福岡県伊良原ダム事務所（3 名） みやこ伊良原学園（3 名） 伊良原地域役員（6 名） J A伊良原支店長 地域有志
スケジュール・方法	【1 日目】 下伊良原に到着。 森林公園予定地および周辺を視察。 計画の内容や現状について説明。意見交換等。 【2 日目】 9:30「こもりくの森」準備会メンバーと会合。 現状の確認や相談、アドバイス、レクチャー等。 14:00 みやこ町長を表敬訪問。 環境事業等について意見交換。 19:00「こもりくの森」検討委員会、行政関係者を対象に講演ワークショップ。 【3 日目】 後評

(3) アドバイスの内容（議事録）

「こもりくの森」準備会に対するレクチャーの中で

- ◆森林公園事業の中にはハード面（施設、森づくり等）とソフト面（体験プログラム、展示等）がある。
- ◆いちばん大事なのは、誰が、誰に対して、何をするために（ソフト）、何を整備するか（ハード）を考えることで、それが商品となる。
- ◆利益の少ない主催事業で実績を積み、利益の多い受託事業を受けられるように育っていく。
- ◆最初から完成形はつくれないので、プログラムの内容、人材育成、施設の整備など、一度にではなく、徐々に進めていく。
- ◆事業をスタートした時から徐々に向上していくようなプラン、資金繰りを考える。スタートした時がいちばん良くて、下降線をたどっていくことは避けたい。
- ◆マスツーリズムからエコツーリズムへ。発地型ツーリズムから着地型ツーリズムへ。
- ◆対象となるお客様の年齢層や人数等を想定して施設をつくり、参加して良かったと思って貰えるプログラムを開発する。
- ◆レイチェル・カーソンの名前を使うのであれば、その名に恥じないプログラムを開発する必要がある。
- ◆ソフト面はレベルアップが可能である。

森林公園検討委員や行政関係者、地域住民を対象とした講演、ワークショップの中で

- ◆キープ協会の環境教育事業の成り立ちについて。
- ◆PDCA サイクルでらせん状にレベルアップ。
- ◆ソフトもハードも少しずつ堅実に進歩する。
- ◆いつも誰かと協働を。自分に出来ないところを人に補ってもらう。
- ◆展示は手作り。いつでも新鮮で、レベルアップしていける。
- ◆環境教育施設に必要な、具体的な要素。 誰が、誰に対して、何を、どこで、いくらで、何のために、するか。
- ◆『センス・オブ・ワンダー』の一節の朗読、スライド。
- ◆マスツーリズムに対するエコツーリズム。エコツーリズムの目指すもの。考え、つくるのは皆さん。
- ◆発地型観光マスツーリズムと着地型エコツーリズムの違い。
- ◆エコツアーに必要な人材。 役者、脚本家、プロデューサー。

後評の中で

◆地域のポテンシャルの洗い出しを。



環境教育棟建設予定地



鷹崛(たかくつ)権現



「こもりくの森」準備会にレクチャー



地域関係者に講演、ワークショップ

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

これまで計画検討を進めてきた検討委員会のメンバーにとっては、環境教育事業の中味や運営の仕方、エコツーリズムの開発等について、より具体的に考える大きな機会となった。また、その他の人々にとっては、計画の中味について知ってもらう良い機会となった。今回のアドバイザー派遣受け入れにより、計画に対する地域の認知度が高まり、協力者や利用できる資源の拡大が期待される。

2) 今後、期待される効果

検討委員会のメンバーにとっては、何をどのように考えたらよいかという方針と、問題点等が強く意識されたと思うので、自分たちの計画をどのようなものにするかという点で検討が促進されるだろう。エコツーリズムという観点から、地域の自然や文化、そして人材を、どのように生かしていくかという議論が今後進むと思われる。また、今回参加いただいた行政関係者や周辺地域の方々とも、新たな協力関係が生じてくることが予想される。

3) 今後の取り組み

今回、地域の方々の、環境教育事業やエコツーリズムに対する理解が促進されたので、これを一つの足掛かりとして、これまでよりも具体的な計画の検討を進めていきたい。アドバイスに従い、一足飛びの進展ではなく、一歩ずつ着実な歩みを進めていけるようにしたい。地域のポテンシャルの洗い出しや、何が出来て何が出来ないかなど、一つひとつ明確にしていくとともに、この地域ならではの個性的な体験プログラムや体験ツアーの開発に向けて、徐々に進めていきたい。

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

いちばん良かったのは、自分たちが抱えている現状について、経験豊富な川嶋氏が一緒になって考えてくれたことである。いつもは自分たちだけで考えているので、今回の様な機会を得て、いろんな部分で考えが促進され、補強された。

川嶋氏のスタイルは、正解を提供するのではなくて、環境教育とはこのようなものですよ、私はこのようにしてきましたよ、エコツーリズムとはこのようなものですよ、ということを分かり易く示し、自分たちでそれが出来るように促してくれるものだと思う。

何か特別な上手い方法を見つけるのではなく、わりと地道に、コツコツとつくり上げていくことを勧めておられるその姿には説得力があった。

2) その他感想

これまではハード面の検討が先行し中心を占めていたが、今後、プログラムや展示など、ソフト面に目を向けていく為の良い機会にもなったと思う。本来、ソフト面を考えて、それを実現するためにハード面を整備するのが良いのであるが、それが逆になっていたところがあり、今回、そのことに対して指摘もいただいたし、発想の改善をしていきたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

川嶋 直氏 (公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

ダム開発に伴う地域への補償として、みやこ町下伊良原地域には森林公園の建設が計画され、1～2年後の完成に向けて工事に着手している。地域ではこの公園を管理運営する組合を設立する予定であり、この森林公園を基地として環境教育事業を立ち上げ、伊良原全体の自然や文化や人材を生かした体験プログラムを開発、実施していく計画である。これまでは森林公園の建設に関わる検討に追われていたが、建設計画のあらまは固まりつつあり、今後は地域のポテンシャルの洗い出しや、具体的なプログラム、人材養成に関することなど、ソフト面の検討に入ろうとしている時期でもある。

「エコツーリズム」というキーワードを意識した地域の取組はまだほとんど始まっていない段階。

②課題

森林公園の施設については官設民営の道を目指しているが、公園事業や、森づくり、環境教育事業など、専門性を要する分野のことに対して、地域にこれまでの実績や蓄積があるわけではなく、これから築いていこうとしている段階。初めに森林公園の建設ありきでスタートしているようなところがあり、官にも大きく依存してここまで来ているので、計画に対して地域住民の意識が追いついていないところがあり、検討の対象もハード面に傾倒しているという印象を受けた。地域の事業を社会とのコミュニケーションと捉え、誰に来てもらってどのように過ごしてもらいたいのか、そのことにどんな価値があるのか、ということをもっともっと考えるようにしたら良いと思う。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

②上記地域資源に魅力を感じた理由

(①②合わせて)

森林公園内には米国の環境運動家であり作家としても有名なレイチェル・カーソンの著書『センス・オブ・ワンダー』の舞台になった別荘(米国・メイン州に現存)を模した施設が建てられるということなので、完成が楽しみである(別荘の持ち主である、カーソンの子孫の了解もすでに得ているということだった)。また、現在日本中の至る所で見られるような、手入れが行き届かず荒れてしまった人工林に、手を加え、生態系バランスのとれた豊かな森を育てる計画だということなので、環境教育のソフトも盛り込んだ森林公園として徹底して取り組めば、森づくりのモデル地となっていくのではないだろうか。森林公園以外にも、古い祠や滝や洞窟などの物語性のある場所や、キャンプ場やコミュニティセンター等の既存の施設もあるので、地域資源が不足しているという訳ではない。一方そういった有形のものばかりでなく、地域の食材を生かした料理や、親切な人々など、無形のものも資源となる、というかむしろそういったもののほうが地域に特性を与え、個性を生み出すものだと思う。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・ 参加体験型の環境教育事業にはハード面（施設、森づくり等）とソフト面（体験プログラム、展示、そしてそれを支える人材）があり、この両面が合わさって、来訪者や参加者の価値ある体験を生み出すことが出来る。それを実現する為には、誰が、誰に対して、何をするか、その為に何を整備するか、というような大きな設計をまず最初に行い、それを実現するために具体的なレベルで考えを整理してゆくことが大切。
- ・ 事業をスタートした時から年月をかけて徐々に成長していくようなプランや資金計画を持つことが重要。スタート時が完成形ということではなく、プログラムの開発や人材育成等については、時間をかけて徐々に進めていくのが良いし、そうせざるをえないというのが現実であろう。特に、ソフト面は徐々にレベルアップしていくことが可能な領域である。ハード面は、目的が固定されたデザインで建設してしまうと後で変更できなくなることがあるので、後々のことまで考えて設計するとともに、後日別の用途でも使えるように、ある程度柔軟性を持たせたデザインとすることも大切である。
- ・ 地域のポテンシャルを洗い出す必要がある。それをやみくもに行うのではなく、何の為に事業を行うのか、何が大切なのかを常に問いながら、それに合致したポテンシャルを拾い上げていく。また、自分たちに必要だが不足しているものについては、外部からの資源や人材と協働することで補ってもらえるが、そういう助力が入って来やすい環境をつくることも大切。私（川嶋）の知る範囲でも、区長の緒方さんがこれまで培ってきた人脈（センス・オブ・ワンダーの訳者：上遠恵子氏、民俗学作家・イラストレーター：遠藤ケイ氏）等、様々な外部ポテンシャルがあるのでそれを活かすことが出来ると思う。
- ・ 着地型エコツーリズムの主体は地域の方々であるが、事業を成立させる為には、少なくとも役者、脚本家、プロデューサー（演劇で例えた場合）というような、複数の視点と役割が必要。来訪者や地域の方々活躍できる舞台をつくるために、協力者を見つけたり、そのような舞台が用意されていることをPRしたりすることも含めて考える必要がある。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在は森林公園管理組合の設立と環境教育事業の立ち上げに向けて進んでいるところであり、そこから派生するエコツーリズムの全体構想にまで十分に検討が及んでいない。

②全体構想策定への意向について

目下は森林公園事業の運営見通しを得ることが先決であるが、将来的には周辺地域の自然や文化を生かす方向で考えている。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

地域のポテンシャルを洗い出すこと。エコツーリズムがもたらすメリット（デメリットも）を意識すること。エコツーリズムと地域振興を結びつけること。具体的な体験プログラムを構想すること。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

森林公園建設計画の検討が目前にあり、施設面に目が行きがちであるが、施設の整備を通じて、人々の「体験」を生み出そうとしているのだということを忘れないでほしい。この地域は、官主導で施設整備が進められており、そこに地域の声も取り入れられており、そういう点は、自分たちだけの人的・資金的なチカラだけで運営している（せざるを得ない）全国各地の自然学校と比較しても大変恵まれていることは忘れないで欲しい。施設デザインの検討にあたっては、誰が、誰に、何をするために、という具体的な体験プログラムを考えることで、どのようなデザインが良いか決まってくる。参加体験型の環境教育事業や、エコツーリズムの開発においては、施設の建設自体が目的ではなく、地域住民や来訪者が役者として活躍できる舞台をつくれるかどうかが重要である。

プログラムの開発については、地域おこし協力隊などですでに経験のある人材も入っているので、これまでに培ってきた町外の環境教育分野の様々な蓄積やつながりを活かしながら、基本的なレパートリーをつくり、参加者のフィードバックを大切に生かしながらレベルアップを図ってもらいたい。

森づくりに関しては、自然生態系を相手にした専門的な取り組みであり、まさにレイチェル・カーソンが『沈黙の春』で指摘したように、近視眼的な考えを避け、息の長い未来の森づくりを指向するのが良いと思う。すでに蓄積されている科学的・実践的なデータを利用し、不足する部分は実践的研究で補うなど、試行錯誤を積み重ねていくことが、環境教育基地を標榜しているこの地域の財産になっていくと思われる。

人材の養成については、先進例に学びながらも、模倣の域にとどまらぬよう、試行錯誤を積み重ねてほしい。特に、インタープリテーションやガイディングにおいて、コミュニケーション能力を磨いていくことはとても大切で、専門的なトレーニングの仕組みを持つようにするのが良いと思う。また、世代交代を意識したメンバー構成にすることや、地域外からも協力者が入って来やすい環境を整えることも大切。そういう意味では、自分たちの取り組みが、第三者にどのように受け止められるか、という視点は大変重要なポイントである。プログラムのモニタリングを行うことや、専門家の意見をもらうことは、自分たちの現状に気づく良い機会となるだろう。